

## 第 21 回世界石油会議に参加して

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所  
常務理事 首席研究員  
小山 堅

6 月 15～19 日、ロシア連邦の首都、モスクワにおいて、第 21 回世界石油会議 (World Petroleum Congress: WPC) が開催された (筆者は 15～18 日まで参加)。世界石油会議は、電力産業関係者が中心の世界エネルギー会議、ガス産業関係者が中心の世界ガス会議と並び、世界の石油産業関係者が集う最も主要なエネルギー関係の国際会議である。主催国ロシアの政府ハイレベル関係者、国営石油・ガス企業のトップ等に始まり、ロシア以外からも閣僚レベルの参加者、国際石油メジャーや IOC、主要国の国営石油・ガス会社のトップを含めた参加者が参集し、世界の石油市場そしてガス市場に関わる重要課題について議論が行われた。日本からも石油・ガスおよび関連産業のトップを含め、約 140 名に上る参加者があった。上述した通り、世界石油会議の名称ではあるが、今日の石油産業においてはガスに関わる問題も極めて重要であるため、天然ガス・LNG に関するセッションなども多数あり、議論の一つの中心であった。

会議開催期間中に、ロシアによるウクライナ向けガス供給停止 (前払い制度への移行に伴う「停止」) のニュースが世界を駆け巡り、世界の関心を集める結果となった。また、おりしもイラク情勢が急激に緊迫化し、原油価格も上昇するという事態の展開で、中東情勢と石油情勢が世界の耳目を集める中での会議開催ともなった。会議期間中には、BP と中国 CNOOC との 200 億ドルに上る LNG 契約 (20 年) の発表もあり話題をさらった。さらに、ウクライナ情勢の流動化の中で、ロシアと欧米の緊張関係が高まり、経済制裁強化の可能性も存在している中、大規模国際会議がロシアにおいて主催されるということで、この点も大いに注目すべきポイントとなった。紙幅の関係で、会議の議論の詳細を紹介することはできないが、参加した 4 日間を通しての所感を以下に整理してみたい。

まずは、改めて国際石油・ガス市場におけるロシアの存在感の大きさを実感した機会となった点がある。本会議開催に合わせて、世界での発表開始 (Global Launch) が実施された 2014 年版 BP 統計 (BP Statistical Review of World Energy 2014) によれば、2013 年のロシアの石油生産は 1,079 万 B/D でサウジアラビアに次いで世界第 2 位 (世界シェア 13%)、ガス生産は 6,048 億立米で米国に次いで世界第 2 位 (シェア 18%) となっている。石油とガスを合計すると、生産量および輸出量で世界最大規模を誇るのがロシアである。また、ウクライナ問題で大きな関心を集めているロシアの対欧州向けを中心としたパイプラインでのガス輸出も 2013 年は前年比 9% 増の 2,113 億立米となった。これは厳しい欧州での需給環境の中でも、需要家からの要請に対応してガス販売価格を引き下げ、価格競争力を回復させたことがその背景にあるといわれている。欧州の専門家は、パイプラインを含む多くのインフラが償却済となっていることもあり、対欧州向けロシア産の天然ガスの

競争力は非常に強く、だからこそ、経済性の観点からロシアのガスを代替することは非常に難しいと指摘する。また、今回の会議では、在来型資源だけでなく、ロシアにおける非在来型資源ポテンシャルや北極海開発、東シベリア・サハリン開発に向けた様々な取り組みについてもロシア企業関係者のトップ等からプレゼンがあり、資源開発におけるロシアの可能性が強調される場面が多く見られた。

実際、本会議ではロスネフチ社長のセーチン氏、ガスプロム副社長のメドベージェフ氏、ルクオイル社長のアレクペロフ氏等を始めとするロシアの巨大石油・ガス企業のトップが次々に登壇し、国際石油・ガス市場におけるロシアの重要性を指摘するスピーチを行った。また、欧米からの経済制裁を意識してか、ロシアの資源開発にとっては、様々な面でのパートナーシップが重要であり、ロシア側はそれを歓迎しオープンな姿勢を取っているという点を強調するスピーチも目立った。一方、経済制裁の存在下、エクソンモービル社長のティラーソン氏、BP 社長のダドリー氏を始めメジャーのトップクラスや多くの産業関係者が登壇、国際石油・ガス市場の今後の発展と課題、そしてその中におけるロシアの位置づけ・重要性等に関するスピーチが行われた。まさに、モスクワにおいて、世界の石油産業関係者が集う中で、ロシアの存在感を改めて確認することになったといえる。

ロシアは先月に中国と歴史的な天然ガス供給契約を結んだばかりであり、アジア市場への進出を一層強化しようとしている。その点では、今後の東シベリア・極東・サハリンでの資源開発の行方が大いに注目されている。本会議では、アジアの天然ガス市場に焦点を当てた議論が幾つかのラウンドテーブルで実施され、ガス価格の地域間格差（アジアプレミアム）問題と今後の価格コンバージェンスの可能性、新たな供給オプションとしての新規 LNG プロジェクトやパイプラインの可能性と経済性等について活発な議論が行われたことも特筆すべき点であったように思われる。

なお、この会議では大いなる存在感を示したロシアではあるが、その石油・ガスの将来には様々な課題があることも事実である。当初予定されていたプーチン大統領とガスプロム・ミレル社長の登壇は、急遽キャンセルとなった。一説には、ウクライナ向けのガス供給停止問題を巡る対応の必要性のためともいわれ、石油・ガス問題がロシアにとって重要であるが故、今日の緊迫した地政学環境が直接ロシアを揺さぶっているともいえる。ロシアの石油・ガス産業にとっては、前述したパートナーシップはある意味で真に重要ともいえるが、経済制裁の強化の可能性は先進技術や市場・販路の面での協力・連携の将来に影響を投げかけている。

この点は、ロシアにとって重大な意味を持つだけでなく、世界市場全体にとっての石油・ガスの供給安定を左右しうる問題である。それも、短期的な供給支障による需給バランスへの影響と共に、ロシアの石油・ガス部門への投資に対する影響を通して長期的な国際需給バランスへの影響も考慮する必要がある。米国のシェール資源開発が進展している一方で、多くの中東やアフリカの主要産油・産ガス国で供給支障が発生している今日、グローバルな需給環境に対するロシアの影響は決して小さく無い。世界の、アジアの、そしてわが国のエネルギーセキュリティを考える上でロシアファクターは今後も極めて重要である。

以上